

高台に建てられた白い校舎。中に入ると、新築の木の匂いが漂ってきた。

岩手県大槌町の町立大槌学園。東日本大震災の津波で被害を受けた小中学校を統合して2015年4月に生まれた。

昨年の今ごろは別の場所にある仮設の校舎だった。昨年9月に新校舎が完成し、移転した。大森厚志学園長(58)は「元氣あふれる子どもたちにとって、仮設は窮屈だっただろう。以前よりも表情が生き生きしている」と話す。

昨年4月からは、学校教育法改正で制度化された「義務教育学校」として、小中9年間の一貫教育に取り組み、町内の児童生徒約640人が通っている。義務教育学校の設置は岩手県では初めて。東北地方でも2校しかない。住民を講師に招いて町の特産や歴史について学ぶ「ふるさと科」も注目され、県内外から視察が訪れる。

「質の高い教育を提供することで、町の将来を担う人材を育てていく」と大森学園長。未来に向けた力強い決意がうかがえるが、言葉の背景には深刻な人口減少がある。津波犠牲者に加え、住宅再建の遅れに起因する人口流出に歯止めがかからないからだ。2015年国勢調査によると、町人口は10年調査に比べ23%減の1万17

時の刻みは～震災6年 岩手・大槌から～

④ 危機感

人口減打破へ環境整備

59人。もともと進んでいた過疎化が、震災によって一気に加速している。

状況を打破しようと、大槌町では

若者の定着を目的とするボランティア団体が活動している。

子育て支援団体「Tsubomi(つぼみ)」。メンバーの菅谷安美さん(26)は、国際医療ボランティアAMD A(岡山市)が設置する「大槌健康サポートセンター」の元スタッフ。経験を生かし、育児をサポートするイベントを定期的に行っている。

「若い人たちが生活できる環境を整えなければ、人が減り、この町はいずれ消滅してしまう」。菅谷さんは危機感を募らせる。

つぼみが主催する育児・生活相談会「ママサロン」の参加者、池田さん(27)は出産のために里帰りした。その子どもが間もなく2歳になるため、夫がいる神奈川県にいったん戻る。いずれは大槌町にUターンし、家族みんなで暮らしたいと思っている。

だが、産業が少ない大槌町に夫の

就職先があるかどうか分からない。自分がパートで働こうにも職種はかなり限られ「岩手に戻ったとしても都市部に住むことになるかも」とぼつり。

菅谷さんは言う。「この町で家計を守るには共働きが必要だ。女性の仕事の場を生み出せるよう、つぼみの活動の幅を広げたい」

「時間の経過とともにハード面の整備は進んでいるが、住民が抱える問題は複雑化、深刻化している」。AMD Aの成沢貴子理事長(59)は大槌町の現状をこう指摘する。

今後息の長い支援を続ける方針は変わらない。AMD Aもサポートを通じ、避難所の運営方法やコミュニケーションづくりなど震災時の対応について多くのことを学んだ。

成沢理事長は言葉を継ぐ。「大きな地震はどこでも起こりうる。岡山も無関係ではない。これまで蓄積したノウハウを生かし、できる対策を進めたい」



大槌学園が使っていた仮設校舎(上、昨年2月)と現校舎(下、今年2月)。時の経過とともに被災地のハード整備は進んでいる。いずれも岩手県大槌町

(秋山昌三)

おわり